



Salamander
in
the circle

第十九章 ミクトランへの道

峯村 明

Salamander in the circle

第十九章の登場人物

レル・ヴァリス	……	エウメロス王国・王室付き近衛隊長
ヘルガ	……	エウメロス王国・王女
カール	……	エウメロス王国・王子 ヘルガの弟
コタエ	……	世界の果ての島の王に仕える女官
スクナ	……	世界の果ての島の王に仕える者 コタエの兄
テクトリ	……	冥界最下層ミクトランの主

これまでの主な登場人物

ネ	ダーヴェ	……	学術調査団の団長	ホシナ	……	ホシナ族の族長。マミヤの父	
ウ	ヒューダー	……	学術調査団の団員	オマキ	……	ホシナの妻	
ト	ヤスウ	……	学術調査団の団員	マミヤ	……	ホシナとオマキの娘	
ラ	ハイヤー	……	本部科学者のリーダー	ゴン・キト・コマ	……	ホシナ族の男たち	
評	ティコ	……	科学者	世	サノヒコ	……	王に仕える役人
議	ナシル	……	本部・事務職員	界	アマセオ	……	王の兵士 シトリ族の者
会	パウ	……	国王	の	カガセオ	……	アマセオの弟
ケ	ウルリク	……	第三王子	果	ヤサカオ	……	アマセオの旧友
ス	ヘンリク	……	ウルリクの息子	て	チドリ	……	アマセオの妻
ト	ソルト	……	警備隊長	の	ハマツ	……	チドリの父
ル	バンテオラ	……	メッサナ市の総督	島	タマシギ	……	ハマツの息子
王	コモラ	……	メッサナ総督の顧問		オモイカネ	……	王に仕える者 日読み
国	バラム&バランケ	……	双子のジャガー。バンテオラの部下		フツヌシ	……	王に仕える者 将軍
	メルノ	……	音楽家		ミツハ	……	メッサナからの亡命後のメルノの偽名
	バルタリス	……	メッサナ市の総督家の一人。総督代理	黄	皇帝	……	皇帝
	メンドルブ	……	メッサナの化学者	金	バイスロイ	……	皇帝の息子
				門			
				市			

目次

ミクトランへの道

301.

302.

303.

304.

305.

306.

307.

308.

309.

310.

311.

312.

313.

314.

315.

back number

第十九章のあとがき

奥付

ミクトランへの道

301.

「アマセオ、ですね!？」

女声に名を呼ばれてアマセオは、はたと我に返った。おそろしい疲弊感があり、立っていることができず、その場にくずおれた。全力で飛び回ったのもあったが、自分の意思でしたことではない、何かに押し出され、何かに引き寄せられた、経験したことのない妙な感覚が体内に残っていた。これはもう、人間の意思による物質、それも人間の転送というもののだが、スクナにしろコタエにしろ意図的に行ったものではなかった。

気の合う者同士、似た者同士の兄と妹が絶妙のタイミングで成し遂げ、たまたま成功したにすぎない。もう一度やれといってもむりだわ、女声の主がそう考えているのを読んでアマセオは愕然となった。ウソだろ!？ と叫ぶところだった。すると、このひとは……

「コタエ様——？」

女性は、さよう、とうなずいた。アマセオはシトリ家の出身だが、そのシトリの本家・タカミムスビの直系のなかにスクナとコタエは属していた。本家の中の本家のお嬢さまがコタエなのだった。

彼女はアマセオがつかんでいる物に目をとめた。「アマセオ、それは——」

「ヘルガさまが。これを持っていくようにと」

コタエは当惑の目をアマセオの背後に駆けつけた者に投げた。その紺藍色のマントの元の持ち主に。

アマセオはとにかく説明しなければと思い、かすれた声で言った。「ケストル北方の氷河湖は決壊しました。山中に川をせき止めていた氷の壁が崩れたのです。水は氷を押し出し、それはおそろしい勢いで——大洪水はまず闘技場を襲い、まもなく王都に達し

たものと思われます。ヘルガさまとスクナさまはまず王城に立ち寄り、それから闘技場に向かわれました。バイスロイさまが王都におられなかったのです——」

「殿下が闘技場へ!？」

いきなり声をかけられ、アマセオはびっくりして振り仰いだ。金髪碧眼の男。ひとめでヘルガと同じ人種だとわかる。その男は、「本当か」とつぶやいて黙ってしまった。

「レルさま」、とコタエ。「その闘技場というのを、ご存知なのですか？」

「ええ、人間同士の殺し合いを観戦するという、おぞましい場所です。そこで僕は、パウル王に囚われているヘルガさまをみかけたんだ。で、アマセオどの、それから？」

「は。私が急行したとき、闘技場はすでに大混乱に陥り、ヘルガさまとスクナさまは地下へ入って行かれました。バイスロイさまの行方を追っているところだった。そこでヘルガさまは私にその布を持って行くように仰せになり、スクナさまとさらに奥へ——」

「その時は三人とも無事だったのね？」

「はい、バイスロイさまは奥へ向かったと、門番が証言しています」

「アマセオどの」金髪の男に肩を掴まれ、アマセオは身構えた。「よく無事に戻られた。ゆっくり休んでください」

302.

アマセオは視界にレルの後姿を感じながら、がっくりと肩を落とした。ヘルガは彼らの王女だった。そのひとを失うことの重大さと衝撃は自分の理解を越えているだろうと感じたのだ。同道させてくれなどという申し出をしなければ、スクナたちは全員生還できただろうか、ならばこの失態の全責任はアマセオ自身にあるのだろうか、そんなことまで自虐的に考えてしまう。あまりにいたたまれないアマセオの生還だった。

肩に手を置かれ、アマセオは顔をあげる。「自分を責めてはいけません。そんな必要はどこにもありません。レル様もおっしゃったでしょう。よく無事に戻ってくれたと。言葉通りに受け取りなさい。エウメロスの人たちに建前も本音もありません。レル様はもし責める気があればその場で責めていました。だから言葉通りに受け取ってよいのですよ」

「あの、レル様という方は？」

「ヘルガさまの警護責任者です」

アマセオはよけいに肩を落としてしまい、声を殺してむせび泣いた。彼が育ったのは男子たるもの人前で涙を見せてはならぬなどという、禁忌のない時代ではあった。兵士だろうが役人だろうが、男性も女性も、大人も子供も、率直な感情表現があたりまえの時代だった。それにしても、人前でこんなふうに泣くなんて、生まれて初めてだった。

コタエは黙ってじっと傍に控えていた。やがていくぶん落ち着いてからアマセオは言った。「言い訳に聞こえるやもしれませんが」と。

「ヘルガさまに初めてお目にかかったとき、スクナさまに抱きかかえられておられたのですが、まるで——小さな、小鳥のようだった。それを見たたん、なぜかとても心が騒いだのです。それは私と重なっているカガセオの心だった。カガセオは言った。お守

りせねばならん。私にはその力がある、と。大きな力を持つ鳥は、その翼でもって、弱い小鳥を守らねばならん。それは力を持つ者の務めであるゆえに、とカガセオがそう言うのが聞こえた。私は――心のままに、ヘルガさまのお力になりたかった」

足音を忍ばせてコタエのところへマントを取りにきたレルはその話を立ち聞きしてしまったのだが、どう考えていいかわからないような衝撃を覚えた。ヘルガがケストルのウルリクかパウルの魔法によって小鳥の姿にされていたのを知っているのはレル自身と父のヴァリス将軍だけのはずだ。ヘルガ本人が誰かに話して聞かせていなければの話だが。

303.

アマセオは少年の訪問を受けた。十代前半に見える、まだこどもこもした少年はエウメロスの王子で、ヘルガの弟だった。彼は体をまっすぐに伸ばし、姉王女の力になってくれたことに礼をいい、貴方が無事に戻ってきたことをうれしく思う、といったことを伝えた。アマセオは返す言葉もなく、ただ黙ってへりくだるだけだった。

王子は例の警護責任者、レルを連れていた。紺藍色の布を、レルは羽織っていた。地下シェルター内でこの手の布……マントをつけている者を何人か見かけたが紺藍色はほかにいなかった。アマセオがヘルガから託されたこの色のマントは警護責任者たる近衛隊長の徴だったのだ。

王子の用件が済んだところで、レルは口を切った。「ちょっと話したいのですが、いいでしょうか」

話し合いの場にはレル、カール王子、コタエ、アマセオ、それから黄金門の皇帝も同席した。

「バイスロイ殿下、ヘルガ殿下、スクナ氏の三名はケストル闘技場で消息を絶ちました。そこで、皇帝陛下、お尋ねしたいのですが、陛下はこの闘技場の存在をご存知でしたか」

「いや。アマセオから聞かされて初めて知ったところだ。聞けばかなり大規模なものらしい。そのような規模、そのような目的の施設を建造するには黄金門への届け出が必要なのだが。されていなかった、ということだ」

レルはうなずき、卓上に紙を広げた。地図、のようである。「陛下、これがケストル闘技場です」

「——なぜこのようなものが——」皇帝に目を瞞らせておいて、レルはアマセオにむかった。「どうだろう、きみは上空から闘技場を見たはずだが、どこがちがっているところはないだろうか」

アマセオもまた目を瞞った。「山の位置……森林の位置……施設の大きさ、かたち……ほぼ……正確と思われます」

「この闘技場に、僕は忍び込んだことがあるのです」

「エウメロス王都が巨人族に襲撃された時、ネウトラ評議会の人間が来ていました。彼は大陸を横断中の航空機に搭乗していた人で、我々が発した救難信号を捉えたのです。僕は城から全員を退避させたあと、彼といっしょにケストルへ飛びました。彼は……ヒューダーという名です……ケストルに仲間を残していた。僕はもちろん、ケストル滞在中のヘルガさまが気掛かりだったからです。

ああ、忍び込んだ、というのは語弊があります。僕らはヒューダーのもつ評議会調査員の権限で正式に入国したのですから。僕らはまず、離宮に通されました。地図のこのあたり、森林のなかに埋もれていて、上空からはほとんどわかりません。その離宮で僕らはヒューダーの仲間、ヤスウと合流しましたが……評議会の人間と言えど、招かれざる客だった。

ヒューダーが剣闘士として闘技場に引き出されたのです。彼は学者であるにもかかわらず、戦士のように態度も体格も堂々としていたのでケストル人に目をつけられてしまった。この試合が始まろうとするとき、観客席にヘルガ王女を伴ったパウル王がいるのを僕は確認しています。そして試合は最後まで行われなかった。途中で騒ぎが起こり、中断してしまった。僕らはその混乱に乗じて闘技場を出、航空機を使って脱出した。この地図はそのとき、機窓からスケッチしたものです」

305.

「そこで、アマセオどの、きみは闘技場を上から見たと言った……」

アマセオはじっと地図を見つめて幾度かうなずき、

「はい。スクナさまに誘導されていたので、観察する余裕が少しばかりありました。私はこっちの山側から、つまり北から進入して闘技場を通り過ぎ、この端でスクナさまに

追いついた」

言いながら指先で飛行ルートを辿った。

「きみは、スクナさんたちはさらにこの奥へ入って行ったといわなかったか？」

「ええ……物音がひどく反響していたので、洞窟のようなものかと……」

「それは——闘技場の南側に洞窟か地下道があるということでは」

はっと息を呑んだのはコタエである。「思い出しました！ ヒューダーさまたちより先にケストルに入った人がいますよね、ダーヴェさまという。ヒューダーさまはその闘技場でダーヴェさまのメガネを手に入れ、私がそれを解析したんです！」

「中身は巨人族に関するもので——まあ、見るに堪えないほどおそろしいものでしたが、巨人族たちが列を成して石造りの薄暗い空間に入っていく様子が記録されていました。その構造物はわりあい、新しいものに見えました——」

「コタエさん、そのメガネは今どこに？」

「ヤスウに。ダーヴェ先生の形見だからとせがまれたので」

「ああ、そういえば。ヤスウが持って行ってしまったんだった」

「でも今の話からすると」、とカール。「闘技場の南側には巨人族の団体が通れるような地下道があるってことですか？」

その場にいた者たちの目がいっせいにカールに集まった。

「ダーヴェさまはそこで巨人族の行く先を記録したのよ！！」

「バイスロイさまは同じ道を進もうとしたんだ！！」

306.

たしかにそこに何か渦を巻いていた。目に見えない何かはゆっくりと円を描いている。最前までなかったものだ。何かの拍子にスイッチが入ってしまったらしい。

バイスロイは恐れげもなくそこへ向かって歩いていく。「バイスロイさま！」「バイスロイどの！！」

背後で叫ぶふたりにちらりと視線を投げて彼は言った。「そなたら、そこにいると死ぬぞ。間違いなく」

闘技場地下に造られた巨大な空洞の上には、いまや空前絶後の水と氷の塊が轟音と共に荒れ狂っている。その圧力は地上の施設を木っ端微塵にし、その地下へも影響を及ぼしている。きな臭い異臭と耳障りな音は岩盤がきしむ証拠。

先へ進むしかない。ここにいたら、死ぬ。間違いなく。スクナとヘルガはバイスロイの跡を追った。

バイスロイは叫んだ。「さあ！ 連れていけ！ どこへなりとも！！」

応じるように見えない渦は密度を増して彼らを包んだ。

307.

瞬間移動の体感覚に似ている、とスクナは考えていた。瞬間移動とは文字通り時をおかずに場所を移動する業であるから、その瞬間の意識というものはない。だが、今は考える時間があった。考えているということは、まだ生きているということだな、と考え

る。どういう仕組みかわからないがどこかへ移動している最中らしい。

なんということだ。

こんなおもしろい経験ができるとは。まさに大冒険だ。

コタエに話して聞かせたらさぞかし悔しがらるだろう。あいつはそういうやつだから。

だいたいあいつは、バイスロイ氏救出のためのケストル行を自分で志願しようとしていたのだ。

バイスロイ氏はヘルガさまを脱出させるためにケストルに残ったというのに、そのバイスロイ氏を助けるために今度はヘルガさまが出向くとは、こういうのをいたちごっこというのではないかとこっそり考えておったわ。

それに、これでは話が面白くない、私が行く。タイトルは『王女の冒険』ならぬ、『王妃の冒険』、こっちの方がキマるわ！　なんて、そんなことまで考えていやがったのだ。

おとなしやかな顔して厚かましいというかなんというか。

アレは世界の果ての島の王の十二人の妃のひとりだからして、王妃であることに間違いはないが、ここはよその国であって、自国ではない。ヒロインはエウメロスの王女様でなくてはならぬ。そうするとレルどどの反応も見どころのひとつに……おっと、これは余計なことだった。

まあ、それほど冒険が大好きなやつなのだ。性分というのはしょうがないもんだ。まったく。おれなんかの妹だし。

さて、この瞬間移動にして瞬間移動ではない移動はいつまで続くんだ？

で、どこへたどり着くんだ？

あれ？　なんだか眠くなってきたぞ。ま、コタエのことを考えててもなんだから、ひと眠りするとするか。目が覚めたらあの世にいたりして。それはそれで面白そうだが

な。

308.

「ここはどこ？」、とヘルガは問うた。「少なくとも、天上の国ではなさそうですが」「ケストル闘技場からどこかへ移ったのはたしかだ」バイスロイは答える。「しかし、まあ、ぞっとしない場所ではある」

ここでもなにかがゆっくりと渦を巻いているのが見える。闘技場地下ではただ感じられるものだったが、かの場所よりもいくぶん明るいここでは渦巻にはうっすらと煙が伴っていた。そのために渦巻が見えるのだった。渦巻の下に円形の何かがある。真っ黒の石でできているようだが、わずかな光に時折、きらりと反応する。よく見ればそれは直径が五メートルはあろうかという大きな円。大小の黒曜石を隙間なくきっちりと嵌めこみ、敷き詰めてある。黒曜石と黒曜石の間に幅五センチほどの金色の線が縦横に走り、複雑な模様を描いていた。

それは後世の人が見れば、霊的存在を呼び出すために行う儀式に使われる図形である、と言ったかもしれない。

今彼らの目の前にある黒い円形は磨き上げられたように滑らかで、そこに映る黒い色を反射していた。それはまるで鏡のようだった。

「煙を吐き出す黒い鏡、か……」

「いったい、何でしょう……」

バイスロイはためらうことなく、ずばりと言った。「転送システムだ」、と。
「古い古い、とてつもなく古い時代の転送システムの一部。転送ステーションだ。かつてこのシステムは世界中のあらゆる場所をまるで網の目のように繋いでいた。それが何を意味するかわかるか、王女よ。この惑星上で、人を動かし、モノを動かすのにほとん

ど時間がかからないということだ。延々と時をかけて陸上を歩いたり、不格好な航空機で危険を冒す必要はない。このようなステーションからステーションへ移動するだけなのだ」

「いったい、どうやって？」ヘルガは釣り込まれるように耳を傾けていて、つい、口を挟んでしまった。話の腰を折られることに慣れていないバイスロイは思わず、むっとした。「そなたは質問が好きだとみえる」

「ああ——失礼を」

「礼を失するには当たらぬ。これはいったい何か。どういう原理で作動するものか。至極もつともな疑問ではないか。ただ、今度質問するときは前もって合図をしてもらいたい」

「……わかりました」

309.

「ある時、このシステムから発生する利益をすべて我が物にしようという者らが現れた。その者らを『闇の者』と呼ぶ。『闇の者』が巧妙にシステムを乗っ取ったことを、人々は長いこと気づかなかった。気がついた時には世界が分断されていた。

システムが真価を発揮していたのは人と物の行き来が自由な時代のことだ。それらが制限され、利益が一ヵ所に集中していけばいくほど、本来万民のものであるはずのシステムの価値は偏って行く。やがて人々は、社会的、日常的に必需品であるにもかかわらず、自分たちに利益をもたらさないこのシステムを疎むようにさえた。こうして長

い衰退の時代が始まった。今はおそらくその時代の末期だ。

システムはまるごと『闇の者』の手に落ちた。ゆえにシステムに関する詳細、どのような規模だったのか、網の目はどのように構成されていたのか、網の目の結び目、つまりステーションはどこにあったのか、そして作動原理は。すべてが闇にのまれ、わからなくなってしまう」

ヘルガは軽く手を挙げて発言の許可を求めた。

「ネウトラ評議会も知らないということ？」

バイスロイは質問者を指さす。「評議会は黙っていた。いずれにも干渉しないのが中立的立場だというのだ。その結果、『何もしない』が評議会の代名詞になった。背後で『闇の者』から多額の献金が動いたという疑惑があったが、結局うやむやになってしまった。つまり、評議会は転送システムについて知らないどころか、乗っ取りに手を貸した疑いさえあるということだ」

「あなたはたくさんのお詳しいんですね」ヘルガは驚きの眼差しをバイスロイに向けて言った。言葉には感嘆の気持ちがこもっていて、バイスロイを持ち上げ、彼の胸を張らせた。

「キングオブキングの立場にある者には当然のことだ。——さて。あれはなんだ」

いつからそこにいたものか。

バイスロイは語るのに集中していたし、ヘルガはバイスロイの語りに集中していたので、気がつかなかった。

巨大な獣のシルエットがすぐそこにうずくまっている。

310.

「大きなネコのようなですね」、とヘルガ。

「ネコか……」バイスロイはいまいまし気に呟いた。「ネコは苦手だ。やつら肉食だしな。それにしても」、と彼はヘルガ、の膝の上をみる。

「たいしたご仁だな。この状況で寝ていられるとは」

スクナは気持ちよさそうに眠っていた。ヘルガの膝を枕に、軽いいびきまでかいて。

*

「お疲れなのです。できるだけ、そっとしておいてあげましょう」ヘルガはそういって、スクナの脚のケガを手当てした。自分のペチコートを引き裂き包帯にし、患部に手を当てる。コタエの見様見真似のやり方だったが、いつのまにやら軽いケガ程度なら治せるようになっていた。レルがコタエと行動を共にするうち遠感を触発されたのと同じ理屈らしかった。ぐっすり眠ってしまっている大男を置いて移動することもできず、彼らはずっと同じ場所に留まっていたのである。

*

大きなネコは床に突っ伏して大きな前足の上に顎をのせ、彼らを見ていた。ただ相手を観察しているといった風情で、飛びかかってくるような気配もなければ威嚇するよう

でもない。存在感がまるでなかったのも、バイスロイたちも気がつかずにいたのである。

と、その時。

黒曜石の円の中央に半透明の影のようなものがゆらめいた。それは徐々に透明ではなくなり、密度を増し、実体化した。それは明らかに人だった。さすがにバイスロイははたと身構えた。彼の側には女性と眠ったままの大男がいる。円の中に現れた者は黒色のマントで体を包み、フードで頭部を覆っていた。彼は……おそらく男だ……円から出てきてバイスロイに軽く手をあげ、スクナの傍らに膝をつき、眼を覚ましそうにないのを見ると、大きなネコを振り向いて手で合図した。

ネコはおもむろに起き上がり、長いしっぽを宙に浮かせて足音もなく彼らに近づいてきた。それは驚くほど大きく、驚くほど優雅だった。ネコは鼻先をヘルガの膝とスクナの間に突っ込み、それから器用に体を動かしてスクナをうつ伏せに自分の背中に乗せてしまった。

マントの男はうなずき、立ち上がって円の中央を指さす。バイスロイ、ヘルガ、スクナを背負ったネコ、そしてマントの男は円の中央でエネルギーの煙につつまれ、姿を消した。

311.

スクナが長い眠りから覚めかかったとき、自分が妙な状態にあることに気がついた。大きな動物の背に乗せられているのである。頭が追いつかず、彼は混乱した。動物は真っ黒な毛皮を持っていて、それは艶やかで滑らかな手触りだった。大男のスクナを背中に乗せているのにビクともせず ゆうゆうと歩いている。スクナは両手両足をだらりと下げているのに手先も足先も床に届いていない。相当脚が長く、骨格が頑丈である証

抛だ。スクナは横目を使って頭部を観察すると、丸い頭に丸い耳を持ったネコ科の動物であるようだった。つまりその動物はネコ科の動物と荷役に適する動物、両方の身体特徴を併せ持っていた。しかし強靱な筋肉を感じさせる優雅な動きは単に巨大なネコであるのかもしれない。そもそも彼は、ジャガーという動物を知らなかったのである。

スクナを背負ったジャガーの隣を歩く者がいた。黒いマントをつけている。視界は薄暗いが、黒いことはわかった。ヘルガはこげ茶の服だったし、バイスロイは多色使いの装飾の多い服を着こんでいたから、黒マントはヘルガとバイスロイ以外の第三者だ。その者が前方を指さそうと片手をマントの中から出した。

「ここは、ネウトラ評議会とやらか」

眠っているとばかり思っていたスクナがいきなりそう言ったのでヘルガもバイスロイも驚いた。しかも、ここはネウトラ評議会かと訊いている。

黒マントの男は立ち止まり、口を開いた。「お目覚めでしたか」。黒い衣装に似合わない、意外なほど明るい声だった。それから続けて、「まだ動かない方がいい。貴方は頭を打っています。もうしばらくそのままです。して、何故、ここがネウトラ評議会かと仰るのでしょうか？」

「貴公の腕輪。それは評議会の身分証だろう」

黒マントは一瞬、黙って、次いで尋ねた。「ご存知でしたか」

「知らいでか」

なるほど、と黒マントはうなずき、「いろいろと話しあうことがありそうですね。し

かしここに長居はできない。ちょっと移動します。ああ、それからここはネウトラ評議会ではありません」

「私も知りたい」とバイスロイ。「ここはどこだ」

「ここは……ミクトラン。冥界の最下層」

312.

「っはっはっはっは」

甲高い哄笑。

「あーっはっはっはっは……あは、あは、あははははははあああ……あーもうだめ、苦しい、息ができない、可笑しくてしんでしまうよおおお」

ばさばさ、ごろごろ、ばさばさと地面を転げまわっているのは大きなミミズクである。大きなミミズクが、けたけたけたけたと笑い転げているのだ。翼をばたつかせ、仰向けになり、うつ伏せになり、たくましいかぎ爪で空をかきむしり、本当に死んでしまうのではないかというのたうちまわりようである。

その様子を疎まし気に眺めているこちらは、カラスである。こちらも、大ミミズクと同じく、闇に溶け込んだように真っ黒。

「けたけたけたけた……けたけたけたけた……けたけたけたけた……」

いつ果てるともなく続く笑いに、さすがのカラスも気分が悪くなってきた。「あの一、もう下がらせてもらっていいですかね、おばさん」

とたんに笑声がぴたりと止んだ。起き上がって、ばさり、と羽ばたくと、空中に垂れ下がっている止まり木にひらりと移動する。

「いま、なんとお言いたい？ おまえ、まさか、『おばさん』と言わなかったかね？」

「はて？ そうでしたっけ？」

「つとに、何度言ったらわかるのかね。あたしはね、ここの女王なんだ。女王さまとお呼び」、と翼の先端を使って、びしりと相手を指さす。

「まだそんなこと言ってるんですか。それはやめた方がいいですよ。だって、冥界王さまにはどうの昔にフラれてるんでしょう？」

「おだまり」異様にしずかにミミズクは言った。「わかってないね、おまえ、ベネトナシュ。冥界王さまはあたしのことをお認めになられた。だからこの一番下の世界の支配権をくださったのだよ」

ものは言いようだ、とベネトナシュはこっそり考えた。冥界王はこの女の凶々しさと厚かましさと嫉妬深さに嫌気がさして、最下層に閉じこめたのだ。

313.

と、いっても、この『一番下の世界』はもととは言えば彼女の一族の世界だった。上昇志向の強い彼女が、もっと上へ行こうとして冥界王に取り入れたのだが、失敗した、というわけだった。

「あんたのような若造にはわからんだろうけどさ」彼女は太い声、もとい、太字で言った。

「あたしたちは愛し合っていたのだよ」

思わずあぐりと口を開けてのけぞるベネトナシュである。

この女、すなわち、冥界最下層ミクトランの女主、テクトリは、冥界王を取り巻く女たちの間に割り込んで関係をめちゃくちゃにしたのである。与しやすい相手は取りこんで味方につけたあげく押しえつけ、それがかなわない相手にはあることないことえげつない噂をばら撒いて、冥界王の傍にいられないように仕向けた。極めつけは冥界王のもっとも気に入っていた女が外で子どもを産んだらしいというのだった。

あれはいったいいつのことだったっけ、とベネトナシュは遠い目で考える。一万年前？ いや一千万年前だっけ？ なにしる長く生きてると『いつ』などということは何の意味ももたなくなってくる。

(冥界王さまはまだバリバリにお若かったから、きれいどころが群がっていたっけなあ。けど、どういうわけか知らんが、お子がひとりも得られないのだということだった。そんなだから、外で浮気して子どもを産んだんだなんて話が冥界王さまのお耳に入ったとしたら——ぶるぶるぶる——よくもそんな面白いことを、いやいやいや、非道なことを思いついたもんだよ)

(性格のわるさなら、女王さまでまちがいないね)

(私でさえこの人の顔を見ただけでうんざりするんだからね。ああ早くうちへ帰りた
い。この人を間近にしているとわるさがうつってしまうよ)

ベネトナシュはひれ伏してテクトリの自慢話を聞きながしていたが、彼女は、はたと
自分が笑い転げていたワケを思い出した。

314.

「しかしベネトナシュ、あんたにはほんっとーに楽しませてもらうよ。一旗揚げてみ
せるってって威勢よく出て行ったくせにさ、もう帰ってくるなんて。ねえ、いったいど
んなドジを踏んだのさ」

ベネトナシュも話が終わっていなかったことを思い出し、こっそり舌打ちして用心深
く答えた。「まあ、いろいろとね」

大ミミズクは止まり木の上でばさりと翼を広げ、ひとつとびでベネトナシュの横に降
り立った。そしてぐいぐいと体を押しつける。「いいじゃないかーお話よー減るもん
じゃなしー」

ベネトナシュは冥界王から追い払われた直近の出来事に想いを馳せた。それにはある
女性が絡んでいる。

テクトリが冥界王のそばで女王然として勢力を張っていたころ、その女は現れた。彼女は若く美しく賢いと三拍子揃っていたものだから、テクトリの方は大いにライバル意識を燃やした。やがて彼女が冥界王から最高の寵を受けるに及んで、ライバル意識の上に嫉妬にも燃えたテクトリは例の噂を流したのである。冥界王の寵愛を受けているにもかかわらず、外で浮気して子どもを産んだという、あの噂だ。冥界王の周囲はその噂でもちきりになり、間もなく美しい女は宮廷から姿を消した。テクトリが快哉を叫んだのは言うまでもない。

そしてベネトナシュはその女に再会したのである。世界の果ての島で。

間違いない。

当時ほんの使い魔にすぎなかったベネトナシュを彼女は覚えていた。ベネトナシュを知る者などいないはずの場所で、ただのカラスをベネトナシュと見破り、息の根を止める用意があることを見せつけさせたのである。それほど力を備える者を、ベネトナシュは冥界王のほかには知らない。テクトリはおどろおどろしい力を持っているがあの女の比ではないことは明らかだとベネトナシュは思う。

現にあの女の前に出ると体が固まったようになって身動きできなくなってしまうのだ。

(それにしても……)

(世界の果ての島に近づいてはならぬという冥界王さまの真意はなんなんだ？ あの女がいるからか？ しかしさ、あの女がいなくなったのは不貞を働いたという不名誉な噂のせいだろ?)

どう考えても解せないのだ。

315.

「なにがげせないんだね？」

「ああああ、いやいや、なんでもないよなんでもない」

ふん？ と、テクトリは妖艶な流し目でベネトナシュを見た。

「ま、あんたのことだからどうせ、しょうもないことだろ。時間は永久にあるんだし、そのうちじっくりほじくってやろうじゃないの。あたしにもたまには気晴らしが必要だからね。ところで、暇だろ？ あんたにとっておきの、すてきなミッションを授けてあげようかね」

ベネトナシュは身震いした。テクトリおばさんのいう『すてき』が文字通りのわけがない。それでも今後世話にならねばならない相手の言うことだから聞かないわけにはいかない。「な、なにをしろと……」

「大掃除さ」

「……大掃除……？」

「ネズミが入りこんでるみたいなんだよ。ちよろちよろとうっとうしいったらありゃしない。とっ捕まえて、あんたが飼ってるろくでもない巨人どもに喰わせちまいな」

第十九章 『ミクトランへの道』

第二十章へ続く

back number

第一部

『第一章 世界の果ての島』

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。

ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

『第二章 破滅の襲来』

調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

『第三章 変態』

エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチャ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。

※・サブタイトルについて。

オタマジヤクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

『第四章 レムリアン・ラブソディ』

ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

第二部

『第五章 メッサナ』

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

『第六章 脱走巨人』

ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチヤとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチヤが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半、レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

『第七章 メッサナからの逃亡』

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

『第八章 IRITIYA』

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだった。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。

一方、イリチヤとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチヤは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

『第九章 原子の火』

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く -原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

『第十章 二極世界』

死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。

ヒューダーの要請に応じるイリチヤの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

第三部

『第十一章 天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。

そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

『第十二章 機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激的な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。

一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

『第十三章 アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。

報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。

この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。

アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

『第十四章 ヤサカオ 立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。

死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようとするが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンがヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

『第十五章 ふたつの北極星』

かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス-死神と対決する決意を固める。

一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。

オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。

はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

第四部

『第十六章 トゥランの七つの洞窟』

冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買って、ついに見放される。

一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起こり、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

『第十七章 ブルー・マーキュリー遭難』

巨人族を殲滅させるべく原子炉製造に意欲を燃やすティコ博士に頼もしい協力者が現れた。評議会西支部のコパーン博士である。メッサナ化学者団と決裂してしまったティコは、コパーンの進言を取り入れ、原子炉から原子爆弾へと舵を切っていく。その様子を耳にした黄金門の皇帝は、評議会には専門家がないのだと見抜く。いずれにしても地下へ潜ってしまったエウメロスには無関係なことだと思われた。ところが事態は急変する。コパーンがティコへ送った無人偵察機が行方不明になった。偵察機は爆弾の製造仕上げに使うブルー・マーキュリーという素材を掲載したまま、ケストル北方、氷河地帯でコントロール不能になったのである。ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっているバイスロイ救出に動き出す。

『第十八章 王女の冒険』

ケストル王国に向かったスクナとヘルガは、途中、アマセオと出会う。彼はホシナ族と行動を共にしてきたが、ホシナ族が安全な場所で逗留中、単独行動をしていたのだった。スクナらが大任を負っているのを知り、アマセオはケストル北方へと偵察にむかう。

ケストル王パウルと対峙し、国民らに避難を呼びかけたヘルガはバイスロイが王都にいないことを知る。彼は離宮へ招待されていたのだった。ヘルガにはおぞましい記憶の残る場所だったが、バイスロイ救出に急行する。しかし王都よりずっと北にある離宮は決壊した氷河に吞まれようとしていた。

第十九章のあとがき

アステカ神話にて、最下層の冥府ミクトランの王にして死の神をミクトランテクトリと
いいます。テクトリは男名でして、奥さんはシワトル。シワトル……「なにかい？ あ
たしがろーばだとでもいいたいのかい？」てなふうに絡まれるのもなんなので、テクト
リの方を使うことにしました。気を遣いますよもう。

アステカ神話には百三十人を超える数の神さまがいて、女神もたくさんいますけれど
も、不貞というのはあんまり聞かない。

ゼウスさまはやりたい放題ですけどね。

日本のホツマツタエをひもとくと、イサナギの弟はえげつない事件をおこしているし、
ソサノヲに至っては完全に不貞行為を…兄上の奥さんと…働いています。もう、神さま
の時代の話ではなく、実際にあったんだろうというリアルさ。婚姻というのはひじょう
に古くからあるもので、これに反する行為は大きな禁忌だったようです。

2023年6月24日 記

奥付

Salamander in the circle

第十九章 ミクトランへの道

2023年6月30日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#) blog [D & R](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#) [イラストac](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
